

Title	<研究論文>envyとjealousyを中心にみる「三項関係情動」 の特質
Author(s)	西隅, 良子
Citation	教育方法の探究 (2003), 6: 76-81
Issue Date	2003-03-31
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/190274">https://doi.org/10.14989/190274</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## envy と jealousy を中心にみる「三項関係情動」の特質

西 隅 良 子

これまで喜びや怒り、悲しみといった人間が日常経験する基本的な情動 (basic emotion) についての研究は多くなされてきている。しかし近年ではそういった基本的な情動に加えて、envy や jealousy といった自己意識的情動 (self-conscious emotion) と呼ばれる、より複雑な情動への関心が高まっている。Envy は jealousy をはじめ他の情動に比べると、これまでそれほど注目された研究対象となっていない。しかし、今日、徐々にその定義や特徴を明らかなものとしようという研究者が現れ、これまで以上に多くの側面から envy を捉えようとしている。この論文では envy と jealousy についての定義に関する過去の研究報告をまとめ、envy と jealousy についての概念を明らかにする。加えて、envy と jealousy を自己、他者そして事象で構成される三項関係という視点から捉え直すことにより、これまで考えられてこなかった envy の反対側にあるポジティブな情動について研究することの意義を述べる。また三項関係の中で現れるその他の情動の解明についても提言する。

**1. Envy の生起メカニズム** Envy についてまず述べるのは、その生起メカニズムについてである。Envy とはどのような状況において、どのようにして生じる情動なのか。Envy についての研究を行ってきた研究者の多くは、その生起に社会比較が関連していることを述べている (Parrott, 1991; East & Watts, 1999; Maijala, Munnukka & Nikkonen, 2000)。社会比較は自己概念に強力な影響力を持つものとされている (Festinger, 1954; Heider, 1958)。自己概念とは自分とは何かという、自分が自身の存在に対して持っている認

識であり、自己を支えているものである。しかし、社会比較といっても、他者と自己を比較した時に、他者が自分に無いものを持っていればいつでも envy 感情を生じるわけではない。

Salovey and Rodin (1984) は、学部学生に、学生それぞれの自己概念に高くまたは低く関連した性質についてのポジティブな報告またはネガティブな報告をした後、その性質に関連した分野で優秀な者、または関連のない分野で優秀な者と接触させて、その相手を評価させた。その結果、8通りの状況のうち、たった1通りにおいて envy が生じることが明らかとなった。その状況とは、自己概念の中心となっている能力においてネガティブな報告を得た人が、その同じ能力において自分より優秀な人と接するという状況である。つまり、envy が生じるためには、自己概念にとって重要である点に欠点や不足が存在するということが重要となるのである (East & Watts, 1999)。人はその自己概念にとって重要な点で、他者と比較した際に自分に欠如しているものがあると分かると、その他者に対して劣等感を抱く。つまり「他者が持っている有利が自分には無い」という認識がなされる。この認識は当然、「この有利が自分であれば相手と同じ立場に立つことが出来るのに」といったような、他者が持つ有利を自分が所有することについての強い願いを導くようになる。他者の有利を自分も手に入れたいという気持ち、これが envy の中心的な要素である。

また、自分と似ていない者や、あまりにかけ離れた者に対しては劣等感や envy を感じるということが少ないということも、すでに研究により示されている (East et al, 1999)。優れている者と自分自身との能力の差が、自分に悪い影響を与えないと

きには envy を生じることはなく、その差が自分の欠点を明らかにするものであったり、周囲の他者の注意を集めたりする場合にのみ envy は生じるのである (Parrott, 1991)。

**2. Envy の種類** Envy には様々な現れ方があると考えられている。多くの研究者によるとそれは大きく二通りに分けられる (East, & Watts, 1999; Parrott, 1991)。研究者によって表現や細かな定義は異なるが、道徳的に受け入れられる envy と非難されるべき envy で分けられることが一般的である (Parrott, 1991)。その区別として「悪意のない envy (nonmalicious envy)」と「悪意のある envy (malicious envy)」がある (East et al, 1999)。前述したように、自己概念に関わる重要な点で、自分に無い有利を他者が持っていることに気付き、それをただ自分も手に入れたいと思うこと、これを「悪意のない envy」と言う。多くの場合、「悪意のない envy」は自分自身にその有利が「無い」ことに意識を向けることで生じ、そのことからあきらめや劣等感を感じる。また、その結果自己を改善しようとする決意や、他者の優れた部分への賞賛をもたらすこともある。一方、他者が持っている有利を他者から無くなることを願うことを、「悪意のある envy」と言う。これは他者が持つ有利を自分が持ちたいと思うのではなく、他者からそれを取り去ってしまうことや他者が持つ有利を破壊してしまうことを願うものである。「悪意のない envy」が自分自身の不足に意識を向けるのに対して、「悪意のある envy」は、自己概念にとって重要なものが自分に無くて他者に「ある」ことに意識を向け、他者そのもの、あるいは、人生における不公平な仕組みに対して怒りを生じる要因となる。これらの2つの envy は欧米の研究によって示されたものであるが、日本においても同じような2種類の envy は存在する。それは、他者が持つ有利に対して自分も同じものを手に入れることを願う「羨望」や「うらやみ」といった表現は「悪意のない envy」に、また、他者の持つ有利に対してなんらかの忌々しい情動

を含む「ねたみ」や「そねみ」という表現は「悪意のある envy」に対応するものではないだろうか。

アリストテレスは他者から良いものを奪うものとしての envy と自己の改善を動機づけるものとしての emulation に区別を行った (Parrott, 1991)。古代ギリシャでは envy は人を壊滅させるものではなく、自己を改善する動機づけを行う刺激であると見なしていた (Herrmann & Paola 2001)。また現代においても、看護科学的観点から、envy そのものについても、精神的な病の症状のひとつとして表れるネガティブな側面だけを捉えるのではなく、自分に不足するものに気付き、その事実を受け入れることによって自己の発展を促進させる健康の要因でもあるとしてポジティブな評価も行っている。このことから Maijala ら (2000) は envy を経験することは人の健康と病の要因となりうるものであるとし、envy の概念について考えることは人の日常の現象を描き出すものと考えられ、看護学の観点からも有用で重要なものであると位置づけている。しかし、近年では、自己の改善への動機づけといった点ではなく、自尊感情の役割と劣等感に注目して envy を考えることが多くなっている。このように、envy を経験するときには同時に違った情動が生じる場合が多く、その区別が困難であることから envy は多種要素的な現象と捉えられている。

**3. Envy と共に生じる情動** Envy が生じるときには様々な情動が同時に経験される。社会比較による劣等感は、有利を持つ他者が高められ、有利を持たない自己が低められることで生じる。劣等感とは他者の持つ有利を手に入れたいという envy を生じると同時に、周囲からの蔑みを感じる原因となり、人に憂鬱をもたらすものでもある。有利を手に入れている他者に対する怒り、また、有利が自分ではなく他者に巡ったことに対する怒りを経験することもある。後者の怒りは、前述した「悪意のある envy」によって引き起こされる怒りと同じものであり、世の中や人生の不公平に

対しての怒りである。人は「悪意のある envy」と共に生じた不公平に向けられた自分の怒りが他者に対して正しいものとして認知している場合と、間違っただけのものとして認知している場合の両方がある。他者に対する自分の怒りが正当なものであると認知している場合は、自分の怒りが envy によるものだとは思っていない。また、自分の怒りが不当なものであることを認知し、他者に対する悪意を含んだ考えが不正であり罪深いことに気付いている場合には、怒りが減少し、罪悪感や恥といった情動を生じる。Parrott (1991) も同様に、envy の一部として経験される 6 つの情動の中で 2 種類の怒りをあげている。それは、人生そのものや環境の不当性についての怒りである global resentment と、有利を持つ他者に焦点を当てた怒り、agent-focused resentment である。他に Parrott (1991) は、相手の持つものを手に入れたいと強く願うという「切望」や、相手にあって自分に無いことから生じる自分自身の「劣等性」、相手に対して感じている怒りが不正なものであるという気付きから生じる「罪悪感」、そして相手が持つものに対する素直な評価である「賞賛」を envy の一部として経験される情動であるとして挙げている。また、他者との比較が行われ、ネガティブな自己評価によって envy が生じるときに中心になる情動は恥だとする考えもある (Herrmann et al, 2001)。Maijala ら (2000) は envy を理論的側面と実践的側面の両側面から捉える試みをし、その概念を哲学的、宗教的、民俗学的、精神分析的、看護科学的観点のそれぞれからまとめ直した結果、envy の経験に近く関連している情動として、怒り、悲しみ、恥、罪悪感、賞賛、失望をあげている。また envy の概念と特徴を共有するものとして、嫉妬と貪欲を envy との境界にある概念とした。さらに、envy の反対概念として感謝、寛容、幸福を挙げている。このように Maijala らは envy と同時に生起する情動について、ネガティブなものだけでなくポジティブなものも考慮に入れている。

4. jealousy について envy の一部として経験される情動、または関連した情動として上で挙げられ、また特に envy とよく混同される情動として jealousy がある。jealousy の研究は envy と比べるとより多くなされてきているが、しかし、jealousy も envy と同様に、情動理論の語としてきちんと位置づけられてはいない。jealousy はパートナーとの大切な関係をライバルに奪われることへの恐れと定義される (Parrott, 1991)。このときパートナーが死んでしまったり、遠い場所に行ってしまったたり、またはパートナーから単に拒絶されたりしても jealousy が生じることはない。最も重要なことは、人とパートナーとがそれまで築いてきた関係がライバルによって奪われるという点である。このときライバルは必ずしも人でなければならないことはない。一般的にライバルが人であることは多いが、動物であっても出来事であっても jealousy は生じる。Jealousy でよく知られているものとして、恋愛関係の中でみられる jealousy や、きょうだい間の jealousy などがある。しかし、同じ上司を持つ職場の人や同じ先生に指導を受けている学生など、パートナーとの間に愛情を含んでいない関係においても jealousy は生じる (Parrott, 1991)。どのような関係の中で現れても、Jealousy にとって中心となるのは、人に必要とされることを必要とするということである。これは他者との関係が、自分自身を安定した存在にするためだけでなく、自己を作り出すためにも必要となるためである。

5. jealousy の種類 これまでの研究の中で jealousy にも二通りの種類があることが提案されてきている。それは「疑わしい jealousy (suspicious jealousy)」と「既成事実の jealousy (fait accompli jealousy)」である (Parrott, 1991)。「疑わしい jealousy」とは、パートナーとの関係がライバルに奪われるかもしれないという恐れがあるが、しかしそれが疑わしいだけで真実がはっきりしていない場合に現れるものである。したがって、この「疑わしい jealousy」は恐れや不確実

性に関連した情動である。反対に、恐れが明確なものであり、また衝動的であるときに生じるのは「既成事実の jealousy」である。これは事実と関連した jealousy である。「疑わしい jealousy」は、パートナーが自分との関係の中で形成した自分への注意をライバルに移していると思った場合に生じるものであり、jealousy と同時に不安を経験する。「疑わしい jealousy」は jealousy の原型であるとされている。一方、「既成事実の jealousy」では、パートナーとの関係についての不安は「疑わしい jealousy」に比べて少ない。しかし、明確となった事実のどのような点について意識を向けるかによって jealousy とともに生じる情動が変わってくる。例えば、自分とパートナーとの関係の喪失に意識が集まると、「悲しみ」を経験するが、パートナーやライバルの悪事や裏切りに意識が集中したときは「怒り」や「苦痛」を感じる。自己の良くない部分に意識が向いたときは「抑鬱」や「不安」を経験し、新しい社会状況への対処する際のストレスに意識が行くと「不安」を感じる。そして、ライバルの優越性に意識が集まったとき、「envy」を生じることとなる。「疑わしい jealousy」と「既成事実の jealousy」ははっきりと区別されるのではなく、状況によって「疑わしい jealousy」の一部を「既成事実の jealousy」の中で感じることもある。「疑わしい jealousy」の中心的な性質は、かなり顕著な疑いと不信、恐れ、懸念、不安、心配、喪失を恐れ怖がる感覚となるが、「既成事実の jealousy」の中心的な性質は他者が持つものへの切望や他者に対する悪意についての罪悪感というものであり、これは envy を構成するものとほとんど同じものであることが分かる。

6. Envy と jealousy の違い envy と jealousy は異なった情動であると認識されているにも関わらず Jealousy を経験するときに同時に生じる他の情動の多くが envy の場合と同じであることから、一般的に envy と jealousy は混同されて認識されることが多い。それでは envy と jealousy の

違いとは一体なんだろうか。まず envy も jealousy も敵意 (hostility) を含む情動とされている (Parrott, 1991)。しかし、jealousy の敵意は正当なものであり、envy の敵意は不当なものとしてされる。これは jealousy の敵意の原因にまず、パートナーの裏切りやライバルの奪取という出来事があり、その結果生じた情動であるためだと考えられる。一方、envy はただ自分が持たない有利を他者が持っているということに自己中心的な怒りを感じているために生じる情動であり、その理由は認められないものとされている。

また、envy も jealousy も社会比較から起こる自尊感情の損失を含むとされている。jealousy の場合、それはパートナーの心変わりによってもたらされるが、一方、envy の場合、自分自身によってなされている。

Parrott (1991) は、envy と jealousy が混同されつつも、一般的な人々が使う中でその2つの語の意味の違いがあるのを確かめるために調査を行っている。envy と jealousy に関連した感情と envy と jealousy との関連の高さを調べたところ、劣等性、切望、憤り、改善への動機づけは jealousy より envy に顕著に関連していることが明らかになった。また他者への悪意感情への罪悪感、自分の感情が不当なものであるという考えも envy に顕著に関連した。また不信や、喪失の恐れ、自己疑念 (self-doubt) や不安は jealousy に顕著に関連していることが明らかになった。この調査から、envy は自分自身の評価が自分についての不満足を引き起こすものであり、jealousy は他者の反映された評価が安全や信頼の喪失を引き起こすものであるとされ、envy と jealousy には質的な違いあることが示された。

7. 三項関係の中で発生する情動 Parrott (1991) は jealousy がトライアングルの関係を含むと述べている。トライアングルとは Jealousy を感じている本人と、パートナーとライバルという3つの項目を示している。著者は envy と jealousy のもう一つの類似点として、この3項目の

中で生じるという点をあげたい。つまり、jealousyのみならず、envyもまた、本人と他者、もうひとつの存在という3項目の関係の中で生じる情動である。著者は本人、他者、そして情動を生じるきっかけとなる存在のこの3項目の関係を三項関係と呼ぶことにする。また三項関係の中で生じる情動を三項関係情動 (triangle emotion) と呼ぶことにする。しかし、ここで著者はまた、同じ三項関係情動とはいえ、envyとjealousyには決定的な違いが存在することも述べたい。それはjealousyがいつでも、パートナーと自分との築き上げた関係という自分の利益の喪失に関わって生じるものである一方、envyは自分の利益に直接関わらない場合においても生じうることである。つまり、これはjealousyが生じる場合、自分の喪失が誰かの利益になるのに対して、envyの場合では、誰かの利益は自分の損失とならないという情動の性質の違いによって異なってくる (Parrott, 1991)。著者はこの場合のenvyのように、自分の利害に直接関わらない事柄に対しても生じる情動に着目する。これまで情動は自己の利害に関わる場合にのみ生じるものとされてきた。しかし、自分の利害に直接関わらない場合においても、人がなんらかの情動を経験していることは日常的に考えられることであろう。三項関係情動のうち、特に、自分にとって直接的に利害が関係しない場合に生じる情動について明らかにすることは、人が経験する情動についてより緻密な知見を与えるだろう。

**8. 三項関係情動の種類** 喜びと悲しみといったように、情動にはネガティブなものとポジティブなものが存在する。三項関係情動もまたenvyやjealousyといったネガティブな情動だけではなくポジティブな情動も存在すると考えられる。特に著者が着目している、自己の利害に直接関わらない事柄に対して生じる情動において、ポジティブな情動とはどのようなものだろうか。Envyは他者が良いものを得たときに感じるネガティブな情動であるが、それではその反対側にあるポジティ

ブな情動とはどういったものだろうか。それは、他者が良いものを得たときに妬むのではなく、まるで自分のことのように喜ぶという共感的な喜びを感じるのだと考えられる。著者はこの情動をempathic joyとして、その詳細について明らかにすることの意義について考える。これまで喜びという情動は、自分自身にとって何らかの利益を得るときにのみ経験される情動であると考えられてきた。しかし、日常生活の中で自分の身近な他者に良い出来事が起こったときに、その出来事が自分の利益に全く関係がなくても我が事のように喜ぶということはよく経験されていることであろう。しかし、これまでの情動研究において、こういった自分の利害に関係しない出来事について生じるポジティブな情動についての研究はほとんどなされてきていない。

また、三項関係情動の中の違ったポジティブな情動として、他者が良くないものを得たり、良くない状況にいるときに感じる「同情」があげられる。これはempathic joyとは異なって、他者に良い出来事ではなく、悪い出来事が起こったときに生じる、相手に対するポジティブな情動である。相手が辛い立場にいるときに一緒にその辛さを共有することは、ネガティブ情動の共感とも言えるだろう。では、同情の反対側にあるネガティブな情動とはなんだろうか。他者が悪い状況にいるときに相手に対して感じるネガティブな情動とはどのようなものだろうか。それは、相手の不幸をその他者が感じているようにネガティブなものとして捉えず、反対にポジティブなものとして捉えるものである。すなわち、日常的な言葉で言うところの「いい気味だ」の情動である。この情動に関しては、英語では的確な表現がないが、ドイツ語には「scha-den-freu-de (他人の不幸〈失敗〉を喜ぶ気持ち)」という的確な表現がある (Parrott, 1991)。他者に悪い出来事が起こったときに、自分はそれを他者が感じるように辛さを共感するのではなく、その悪い出来事が起こったことを喜ぶという情動である。

これまでempathic joyや「いい気味だ」といっ

た情動についての研究はほとんどなされてきていない。これらの情動は全て、自分と他者と何らかの出来事もしくは物事の中で生じる三項関係情動のひとつである。しかも、これらの情動はこれまでの研究で取り上げられてきた怒りや喜び、悲しみといった他の情動のように、その情動の対象となる出来事や物事が自分の利益に直接に関係していない。人は自分の利益に直接関係しない事柄についても、その出来事や物事に関わっている他者との関係性や、そのときの自分の状態や、相手の状態、その事柄への自分の関心などが関わって、情動を生じることがあり得るのではないか。三項関係情動は人の日常生活の中で頻繁に経験されるものであり、その詳細を知ることは人の情動経験について考察を深めるためにも重要であると考えられる。三項関係情動、特にこれまで研究の対象となつてこなかった empathic joy と「いい気味だ」に相当する情動について、その生起に関する要因や、生起メカニズムを明らかにすることは意義があると考えられる。

## 文献

- Anderson, E. R. (2002). Envy and Jealousy. *American Journal of Psychotherapy*, 56(4), 455-479.
- East, P. M. & Watts, N. F. (1999). Jealousy and Envy. In *Handbook of Cognition and Emotion* (T. Dalgleish and M. Power. Ed.), John Wiley & Sons Ltd. 569-588.
- Festinger, L. (1954). A theory of social comparison processes. *Human Relations*, 7, 117-140.
- Heider, F. (1958). *The psychology of interpersonal relations*. New York: Wiley.
- Maijala, H. & Munnukka, T. & Nikkonen, M. (2000). Feeling of 'lacking' as the core of envy: a conceptual analysis of envy. *Journal of Advanced Nursing*, 31(6), 1342-1350.
- Parrott W. G. (1991). The emotional experiences of envy and jealousy. In *The Psychology of Jealousy and Envy* (P. Salovey. Ed.), New York : Guilford Press (3-30).
- Salovey, P., & Rodin, J. (1984). Some antecedents and consequences of social-comparison jealousy. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 780-792.

(修士課程)